

平成10年 2月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

河と生活

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世中にある人と栖と、またかくのごとし。

これは、平安時代の末期に、下鴨神社の神宮の子として生まれた鴨長明（1151～1216）が、世の中の移り変わりを無情観を持って書き記した『方丈記』の最初の出だしです。川面の表情を見て、上記のような名文を残した彼の才能に感心させられる。

その川についてだが、青梅市内のほぼ中央を多摩川が西から東の方向へ流れている。多摩川は日頃の私たちの生活に、様々な形で関わりを持っている。交通の障害になっているのは、その例であろう。南側と北側の往来のために、古くは渡し場が各地に設けられ、また橋が架けられている。かつては、1年中往来が出来る橋は「万年橋」と称されていたが、江戸時代に架けられた御岳の万年橋と、日向和田の神代万年橋については、本紙第50号（1991年12月15日付）に詳しい。

青梅（釜ノ淵）と畑中1丁目を結ぶ万年橋は明治30（1897）年に架けられたが、当初は木製であった。その後、明治40（1907）年には鉄骨の橋に、架橋にたずさわった畑中橋徳会の苦勞と橋の変遷、由来などを記した碑が建てられている。

次に、私たちの生活と深く関わっているのは、地形と地質である。市内の平地はすべて河川によって形成された土地である。市内西端の御岳駅付近から青梅市街地を経て、東端今井から友田にかけては多摩川によって、黒沢川の西側の平地は黒沢川によって、成木川の両側の平地は、霞川によって形成された土地である。

東青梅から東側は、「武蔵野台地」と呼ばれ広大な平坦地であるが、武蔵野台地は数百万年間にわたって、多摩川が奥多摩の山地から運搬して来た砂や砂利（礫）が堆積して形成されたところである。今から2万年前頃から、多摩川は運搬する砂や礫が少なかったため、河底が浸食されるようになった。そのため、河の西岸は階段状の地形（河岸段丘）になり、現在にいたっている。階段状の地形のうち、平坦地は住宅地や畑地として利用されているが、急斜面は林や空地となっている。青梅は坂の多い町であるが、これは多摩川によって形成されたためである。

（文責 角田）

***博物館講座のお知らせ**

青梅市文化財保護審議委員 齋藤愼一先生を講師に迎え、武蔵御嶽神社所蔵「国宝赤糸威鎧」の沿革についてわかりやすく説明し、古くから注目されていた事実を明らかにします。

3月14日（土）「古文書による赤糸威鎧の沿革」

15日（日）「八代将軍徳川吉宗と御嶽の赤糸威鎧」

二日間とも、会場は青梅市市民会館第1、2、3会議室で午後2時から4時までです。

定員30人。問い合わせ、申し込みは、郷土博物館（0428-23-6859）まで。